

熱を、与える

捜真女学校高等学部3年 羽村 萌菜

「社会に出たら、そんな甘いこと言っていられないよ」

大人たちがよく口にする言葉だった。私は、それを聞かたびに、感情を閉じて生きるのが大人の正しさだと教えられているような、心のどこかで何かが少しずつ削られていくような感覚を覚える。

効率よく、損せず、誰よりも先に。そんな空気に包まれていた大人の世界は、人と人との間に、目に見えない壁が立っていて、誰もが感情を凍らせて、表情を消して生きているように見えた。

「好き」や「夢」が贅沢品のように扱われるようになったのはいつからだったか。夢を語っていたのに、「その夢で食べていけるの?」「現実を見なよ」と、大人たちは早く目を覚ませと言わんばかりだった。気づけば私は、自分の好きや不安さえ口にしできなくなっていた。誰かの期待に応えられなければ、価値がないような気がして。何かを失敗することが、即座に「落第」のように感じて。

大人になるとは、こういうことなのだろうか。自分の心を閉じて、黙って冷たい水の中を歩くように生きていくことなのだろうか。

でも、その冷え切った心に不意に熱をくれた人がいた。

「大丈夫。あなたはあなたのままで、ちゃんと光っているよ。」

私の作文を読んでもくれた国語の先生の言葉だった。私の言葉を見てくれた。私の心の声を聴いてくれた。先生の声は、決して大きくも力強くもないけれど、冷え切った私の心をゆっくりと温めていくような、確かな熱だった。それまで聞いてきた「がんばれ」とは違う。無理矢理背中を押すのではなく、震える肩にそっと上着をかけてくれるような、そんな言葉だった。

その瞬間、私は思った。教師というのは、心に熱を灯すことが出来る人なのだと。

私はそのとき初めて、大人になることが「冷たくなること」ではないと知った。熱を持ち続けること、誰かの心に寄り添えること、それもまた「強さ」の一つなのだと、先生が教えてくれた。

教師という仕事は、華やかな舞台も脚光もない。日々の繰り返しのなかで、目立たない努力を何年も積み重ねる仕事だ。だけど、その言葉一つが、誰かの人生を変えることがある。私のように、冷えた心にそっと熱が与えられたように。

「成功」や「勝ち負け」では測れない価値が、この仕事にはある。表には見えないけれど、生徒の中で芽吹いていく「自信」や「希望」という種を、誰よりも信じて水をやり続ける。それが教師という存在なのだと思う。

大人になることが「冷たくなること」だと、どこかで諦めていた私に、先生は「そうじゃない生き方もある」と、静かに示してくれた。

それは、私にとって初めて感じた「教師の魅力」だった。その姿には、目に見えない確かな「熱」がある。

成績だけでは測れないもの。言葉にできない不安にそっと気づき、何も言わずに隣にいてくれる強さ。言葉よりも先に、まなざしで安心を届ける優しさ。それこそが、教師という存在の魅力なのだと、私は思う。

私の中の小さな火を、先生は確かに見つけてくれた。それは「可能性」でもあり、「自分を信じてもいい」という新しい視点でもあった。その火は、今も私の中で暖かく燃えている。

知識を与えるだけでなく、人生のある一瞬で、心に火を灯す。その火は、すぐには見えないけれど、時間をかけて、じっくりと燃えていく。そしていつか、その火が、新たな熱となって、また次の誰かに手渡されていく。

教師とは、そうやって「熱のバトン」をつなぐ人だ。

社会の冷たさに怯え、自分の価値を見失いかけていたあの頃。先生の言葉は、唯一私を人として見てくれた気がした。結果でも役割でもなく、ただ「私」でいることを肯定してくれた。その瞬間の熱を、私は一生忘れない。

だから私は、教師になりたい。今の私がもらったような、「ありのままでいい」とそっと支える言葉を、今度は私が誰かに届けたい。冷えた心に、そっと火を灯せる人でありたい。そしていつか、迷いながら生きる誰かに、こう言おう。

「大丈夫。あなたの中にも、ちゃんと熱はあるよ。」